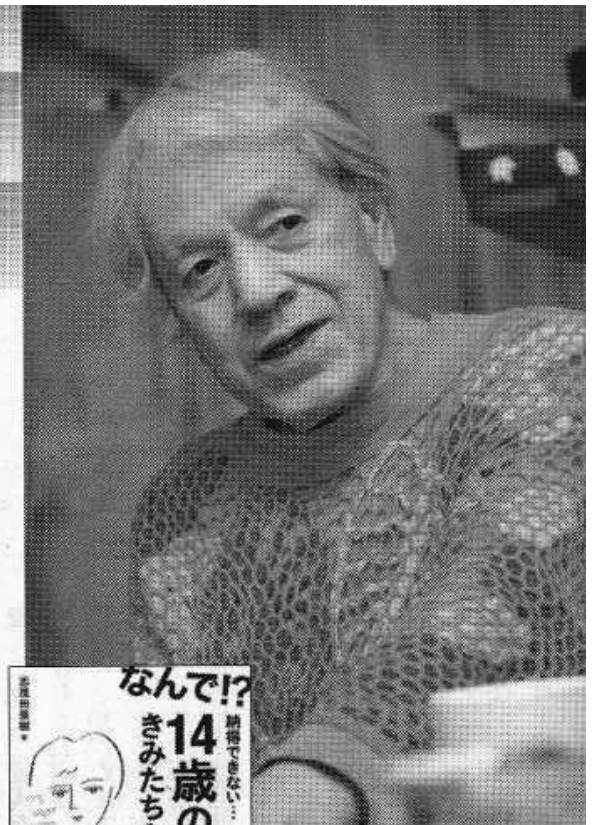


# SUNDAY LIBRARY

## 志茂田景樹

### 生きているからこそ わかることが必ずある

INTERVIEW



『なんで!? 納得できない…  
14歳のきみたちへ』  
志茂田景樹  
(じゃこめてい出版/1260円)

人の一生における、十四歳という季節。時代の違いはあっても、そこにはある種の普遍性が宿っている

はずだと志茂田景樹さんは考える。

「中一の時はまだ小学生の気分を引きずっています。十四歳になると大人の自我が芽を出します。さまざま葛藤があり、自分で自分を持って余すようになり、親もわが子が見えなくなる。そんな時期の子たちに届く本を作りたいと思いました」。

学校、仕事、日本、愛と四つのテーマを設定し、Q&A方式で悩みや疑問などについて触れている。

「一九九九年から『よい子に読みなかせ隊』と称して活動を始めました。その過程で出あった問いや、ツ

ら

イッターに寄せられた中学生の質問などがベースになっています」

読み聞かせ活動は、これまで通算千六百回以上、多い年では二百回を超えたこともあるという。

「阪神淡路大震災から四年ほどたった時、西宮市のある小学校のPTAの方からオフアアがありました。

『この地域では、いまだに夜中に悲鳴をあげて飛び起きる子、道路を大型トラックが通過する際、その振動が怖くて周囲にいる大人に抱きつく子などがたくさんいます。絵本の読み聞かせで、少しでも心を癒やすことができないでしょうか』と

依頼を快諾した志茂田さんにはしかし、不安もあった。志茂田さんの書く絵本には必ず悲しい場面がある。苦しんでいる子供たちを前に、いつも通りにやっていたいものだろうか。

「しかし先入観は良くないと思いますし、普段通りにやりました。すると、悲しい場面で涙を流す子が通常の何倍もいて、最初、『やはりまずかったですか』と思いました。でも違ったんです。彼らは感動してくれたんですね。

読み聞かせの後、子供たちがいつまでもぼくたちにくっついて離れない、その様子からよくわかりました。その時の経験から、命の大切さ、生きることの素晴らしさを伝えることを

根幹に据えようと決めたんんです」

そして3・11以降、また新たな局面に立たされることになる。

「栃木県小山市の避難所を訪ねた時、ある小学校高学年の男の子が、『ぼく、これからどうなっちゃうんだらう?』とつぶやいたんです。これは『自分の体は五年、十年後にどうなってしまうのか?』という、根っこにこびりついた不安で、今まではステージが違う。読み聞かせにその不安を払拭する力はないと、無力感にさいなまれました」

その不安を口にした子が十四歳を迎えた時、この社会を、この国を、そして愛というものをどんなふうを受け止めてほしいのか。この本には、そんな厳しい認識も込められている。だからここには、手取り早い解決の処方箋は出てこない。

「それでも少しは、言葉を通じて、届けられることがあるだろうと思っています。読み聞かせは九十五歳くらいまではできそうな気がしているんです(笑)。その後は沖繩に移住してのんびり執筆。百歳を超えて書いていけばそれだけで希少価値があり、少しは仕事も来るでしょう(笑)」

微力は無力ではない。そう信じて、作家は言葉を届けるのみだ。

構成・北條一浩

しもた・かげき 1940年静岡県生まれ。20種類以上の職を転々とした後、作家を志し、80年、『黄色い牙』で直木賞を受賞。「孔雀警視」シリーズなど人気作のほか、近年は絵本の執筆と読み聞かせ活動に力を注いでいる。

撮影・水本圭亮